

台湾、韓国における大学入試改革の現状

大学入試センター
岩坪 秀一

はじめに

昨年(2000)の7月に開催された国際シンポジウム「21世紀に向けての大学入試」には、韓国からは金 相吉(国立教育評価院)、姜 武燮(教育開発研究所)の両氏、台湾からは前台湾大学入試センター副所長の黄 炳煌氏(国立政治大学)が参加し、大学入試改革の取り組みについて紹介があった。中国からの参加も期待されたのだが、ちょうどこの時期は統一試験の真っ最中ということで、残念ながら欠席となった。

本シンポジウムにおいては、本誌に池田氏を書いておられるように、参加各国には、

- ① 中等教育に対する大学入試の影響を適切化するにはどうしたらよいのか
- ② 多様な能力評価を実現するためには中等教育と高等教育の接続をどのように工夫したらよいのか
- ③ 大学入試の機能によって教育制度全体を活性化するにはどうしたらよいのか

の3つの課題に対してどのような努力がなされているか、それらに答える形での報告が求められた。これらの課題の根底には、21世紀に向けて、高等教育と初等中等教育とを調和の取れた形で接続することが重要であり、大学による選抜から、大学と高校との連携へと転換していかなければならないという主催者側の思いが流れている。

韓国と台湾は、大学入試改革の基本線を、とりわけ高校教育に悪い影響を及ぼさない点に置いているところに大きな特徴がある。そ

のことを反映して、①に重点を置いた報告がなされたように思う。以下、具体的にどのような改革が進んでいるか、またどのような問題点があるか、シンポジウム報告に基づいて概略を紹介しよう。

韓国の大学入試改革

韓国は、わが国よりも早く客観式テストによる統一試験制度を導入したことで知られている。これまで思い切った改革が行われてきたが、現在、大学入学者選抜は

- ① 高校成績
- ② 大学進学適性テスト
- ③ 大学による個別試験

の組み合わせ(「①のみ」、「①と②」、「①と②と③」)によって行われている。

①は、高校教育における学習成果の尊重を打ち出したものであり、選抜にあたっては①の比重を40パーセント以上にする、とされている。さらに②は、後述するように高校教育のカリキュラム正常化を目指すために導入されたものであり、①を補完するものである。現在、①と②とを採用している大学が一番多い。③は、①と②によっても差がつかない最難関大学(京城、高麗、延世、梨花大学等)が採用している。ちなみに、京城大学は、個別試験 40 パーセント、大学進学適性テスト 20 パーセント、高校成績 40 パーセントの比重で入学者を選抜している。個別試験の科目数については、出来る限り少なくして高校教育へ悪影響がないように要請されている。

大学進学適性テストの問題作成は、国立教育評価院によってなされている。そこに所属している金氏から、テスト問題の特徴についてかなり詳しい紹介があった。

このテストは、高校における教科・科目の学習で培われた力を総合的に測ろうとするもので、5肢選択式の統一テストである。(設問によっては「正解なし」の選択肢が設けられているものがある。)知識偏重ではなく深く考えさせる出題を目指しており、出題範囲は以下の四つからなっている(200点満点)。

- ① 言語能力(60点):語彙力、意味把握力、推理力、批判力、論理的力を見るもの。
- ② 科学的探究能力(I)(40点):課題を数学的に考え解決する力。数学の基礎知識や応用力を見る。
- ③ 科学的探究能力(II)(60点):文系学部に進学希望の受験生は社会科学関係の、理系学部に進学希望の受験生は理科関係の課題を解決する力を見る。
- ④ 外国語能力(40点):現在は英語のみであるが将来は日本語も含め他の外国語も導入を予定している。

①と②とは、アメリカのSATに似ているように思われたが、独自の工夫をしているそうである。また①と④では、聴き取りのためのリスニング・テストが実施されている。

高校成績がかなりの比重を持っているが、その取扱いがなかなか難しいのではないかと思われた。はたして姜氏からそれに関連した改革への動きについて報告があった。

高校成績をめぐる問題点は以下の通りである。標準化された高校成績(順位を基盤にした相対成績)が導入されたため、生徒間の競争が激しくなったこと、地域間、学校間の公平性の問題が浮上していること、高校成績の比重が高いために、大学によっては独自の入学選抜がやりにくいこと、などである。高校成績の問題点以外にも、難関大学の個別試験があるために、相変わらず国語、数学、英

語を重視した学習がなされていること、大学進学適性テストと個別試験との両方に向けて勉強しなければならないので二重負担になっている、などが表面化した。

以上の問題点を克服するために、国際シンポジウムの直前(1995年5月)に「教育改革に関する大統領審議会」の答申が出された。

主な改革は、大学の情報を受験生に知らせること(わが国の大学入試センターの事業の一つ「大学情報提供」に相当する)、高校成績を相対評価から達成度評価へと変え、さらに学業以外の活動を評価すること、大学に自主性を与え、上記のように改善された高校成績、大学進学適性テスト、個別試験としての論述式テスト及び面接等を選抜資料として用い、その比重の置き方もまかせること、などである。大学進学適性テストも選択科目を増やす方向で整備される。国公立大学と私立大学では、後者に一層自主性を与える方向で答申が出され、1997年実施に向けて準備が進んでいるとのことである。

このように、韓国の大学入試においては、選抜資料を多様に利用しようとする方向に動き出していることがうかがわれた。

台湾の大学入試改革

台湾の大学入試においては、国公立大学(50校)すべての入学選抜が、「聯考」と呼ばれている共通試験の成績によってなされている。試験科目は、必修が中国語、英語、三民主義であり、選択が歴史、地理、数学A(理系数学)、数学B(文系数学)、物理、化学、生物であり、これらから専門分野(4つのコースに大別)に応じて3科目を選択することになっている。数学は選択科目ではあるが、どのコースに進もうと必ず受験しなければならない。問題形式は記述式と客観式との混在である。各試験科目とも100点満点。学部・学科によっては、特定科目の得点比重が高くなる。また、最低点を示してそれ以上

の得点を要請する場合がある。

選抜はまず成績順で、次に志望順で行われる。たとえば、第二志望でも成績が上位ならば第一志望の受験者より優先して選抜されることになる。

この選抜方式は、これまで一部手直しがあったものの基本的には、1954年の導入以来ずっと続いてきた。それなりの使命を果たして来たものの、

- ① 各大学の選抜に対する自主性は制限されていること。
- ② 成績順位優先のため、不本意入学の問題があること。
- ③ 大学の序列化が顕在していること。
- ④ 難関大学に入学を送り込んでいる高校へ入るための激烈な競争が行われ、中等教育を歪めていること。
- ⑤ 高校教育を歪めていること。知的発達ばかりに重点を置きすぎる、理系コースと文系コースとに早くから分かれてしまう。

など、とくに1980年代に入って強い批判の声が上がってきた。これを受けて、1989年に台湾大学入試センター（以下「センター」と略記）が設立され、大学入試改善に乗り出したのである。

センターは、諸外国（わが国も含まれる）の大学入試制度を精力的に調査・研究し、さまざまな検討を踏まえ、最終的に以下のような大学入学者選抜方式の改善案を提起した。

- ① 2段階選抜方式にすること。

第1段階：国語、英語、数学、理科、社会科学からなる共通試験により、基礎的な学力を見る。共通試験実施は作題も含めてセンターが担当する。

第2段階：大学・学部が個別に行う。ただし、2教科以下とする。

- ② 選抜資料の利用の仕方を工夫すること。
 - ・志望順位を優先する。
 - ・成績は点数ではなく、0から15までの等級で表示する。

・成績は、専門分野によっては、「合格」「不合格」だけで表示する。

①の2段階選抜は、わが国の共通試験制度に似ているが、特徴は②のように成績表示の工夫にある。このようにすれば、1点の違いに一喜一憂しないですむというのがねらいである。

以上の新しい入試制度は、1999年から発足するが、その前段階としてセンターは、1994年に推薦学力試験を導入した。この試験は、大学・学部が高校から入学希望者を推薦してもらい、推薦された集団についてセンター作題の客観式テストを課すものである。その成績結果と大学・学部独自の選考によって入学者を選抜する。大学・学部側も、本当に学びたい者が志願してくるので歓迎したこともあって、初年度7,404名だった志願者が、翌1995年には、22,596名と急激に増えた。この成功に力を得て、センターは1999年に向けて鋭意準備を進めているところである。

おわりに — 情報交換の促進 —

以上、紹介してきたように、大学入試をめぐって韓国、台湾の抱えている問題には、わが国のそれと極めて似ているものが少なくない。日本、韓国、台湾は、儒教圏に属している。それぞれの国民性には「一心不乱に努力すれば、必ず目的を達成出来る」という努力信仰が深く根付いている。もちろん、儒教精神には「勤勉」という良い面もあって、そのお陰で日韓台は、目ざましい経済成長を遂げて、国民の多くが高等教育の恩恵を受けるくらい豊かになったのである。しかし一方で、さまざまな入試制度改革をしても、そのたびに激烈な競争（これも努力の表れである！）が始まり、やがて弊害が目立つという図式をたどることも事実である。大学入試が教育全般にわたって大きな影響力を持つことは、いまさら言うまでもない。初等中等教育から高等教育まで「学ぶ」ということはどういうこ

となのか、また、「人間らしさ」を培うためには、どのような教育の接続を考えていくべきか。日本、韓国、台湾とも、こうした教育の原点に回帰しなければならない事態を間近かにひかえているのではないか。大学入試のみならず、それぞれの経験を失敗も含めて率直に語り合い、そしてお互いに知恵を出し合って、この複雑な時代を乗り切っていくことの大切さをしみじみ感じた次第である。

〔参考文献〕

大学入試センター、国際シンポジウム報告書
「21世紀に向けての大学入試」(1995年7月)、
1996年3月発行。